

氏名	友清 千聡
ヨミガナ	トモキヨ チサト
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第435号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 継母なる大地 〈作品〉 dream around the sunset

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	齋藤 芽生
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	小山 穂太郎
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	O J U N
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	小林 正人

（論文内容の要旨）

この論文は自作と風景、また風景画との関わりについて論述したものである。タイトルに使われている継母とは、自作においてイメージソースとなる九州の原風景そのものを意味しているのではない。それは私が、原風景というものの自体が、変化しとめどないものだと考えているためである。そしてタイトルの「継母なる大地」とは、原風景の「母なる大地」から離れたとしても、他の土地で原風景と同じような感覚を得られたとき、それを「継母なる大地」と呼べるのではないかというものである。作品としてはそれを、交換可能な素材やイメージ、または抽象的、観念的になぞられた形態や色彩によって再構築されたものを指している。しかし制作の傍ら実際のふるさとをみつめ、そこでいま起きていることを通して得た現在の結論は、「母なる大地」はふるさとのことではなく私の体験の中にあるということであった。私の創作は、自然と人間が交流した際の心の風景を、「継母なる大地」として描き直す役目を果たしているのである。

1章では、九州の風景と、自作が私にとっての風景画と考えるに至った経緯を述べた。自然豊かな郊外で育った私は、そこで、人工物の混在する農村から雄大な山脈をながめ、小さな願掛けなどをすることで、目の前の人工物の断片から様々な大自然を想像する習慣がついた。そして19才で関東に移住し、自然を遠く離れて想うことで、初めて風景を風景として自覚し思い慕うようになり、ロマンチックという概念から、自作が多様化した風景画であると意識することになった。断片としての人工物は、自然と人間の交流をつなぐものとして作品に登場した。

2章では、「作品が誕生」したと自分自身が思った時、それまでの作品とは違った作品を思いもよらずに作ってしまった出来事、その後の考察と創作の意味について述べた。植物や原風景などを想像してつくった個々のモチーフは、総体として風景画となり、それらをのせた台には車輪が取り付けられ、丸ごと地面から少し浮いていた。幼時の登山時、遠景と近景を交互に体験しながら山道を進んだ記憶は、距離、移動という創作のキーワードを生み、そこから個と個の間には距離があり、ものは常に単体で世界を動き回っているという考えへと発展した。

3章では、ふるさとは、私が離れて暮らす間に画一的な都市化が進み、マンション建設を極めつけとして原風景が失われていったことによる作品の変化について述べた。同時に東日本大震災がきっかけとなり、原風景とは心では永遠でも、土地は刻々と変化するとめどないものであることに気づいた。それまで離れて想うものであった原風景のある土地に、一度向き合ってみようと、「28ZAKI海浜博覧祭」という展示を開きディレクターを努めた。私にとって転機となったその展示について述べた。

4章では、これまでの3年間の制作と、博士展に提出した作品について述べた。原風景を「母なる風景」とすれば、ここでの作品は、たとえそれが実際に失われても、新たな場所で見いだすことが出来る再構築された「継母なる風景」としてつくられている。実際の時間は、容赦なくその瞬間から遠ざかる。私は自作における風景を、生者の為の儀式と考え、風習の影響を受けた制作手法をとった。「素材の解体」「印象の突出」「意味の解体」などにより、簡易な素材を用いて、様々なスケール感で距離感を変化させながら、新たな風景「継母なる風景」を作り出す経緯を述べた。

私はある種の型や儀式的な体験から、流れ行くとめどない精神を再生させることに興味を持ち、死や喪失からの再生をイメージしながら創作した。九州の原風景やその後新たに出会った風景が、重層的に重なり更新され、残された者の生の継続する場所、それが「継母なる大地」なのである。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、原風景の「母なる大地」から離れたとしても、「他の土地で原風景と同じような感覚を得られた時、それを「継母なる大地」とよべるのではないか」と考える筆者が、印象を再構築する制作したいを「継母なる大地」と捉えるにいたった経緯を論述したものである。筆者の作品は、多くのパーツが雑然と置かれたようにも見える難解なものだが、本論文は、それが筆者独特のイメージの飛躍と変換によるものであることを明快に示すものとなった。

郷里・九州への筆者の思いは強い。郷愁という以上に、九重連山への登山や、玄海灘、自然と街が交錯する郊外の実家など、高校時までのそこでの様々な体験が、現在の作品の各パーツや制作方法に直結している点が注目される。形式はインスタレーションだが、筆者自身はそう言われることを否定し、風景あるいは風景画としてそれを捉えている。全4章の構成では、第1章「原風景」で九州での体験を詳述し、登山の体験が、身体感覚の記憶から「移動」というキーワードを生んだこと。そこここで目にした、組紐やビニールシート、神社の紙飾りといった個別のモチーフが、視覚的記憶として現在の作品のパーツに脈絡なく現われていること。しかしその総体が筆者にとって風景であり、やがて自然との魂の交流という点から、ロマン主義風景画に自作との共通性を感じるようになったことを述べる。第2章「創作の意味」では、友人の死を契機に衝き動かされるように制作した作品で、現在の作品が「誕生」したこと。第3章「母と大地」では、実家近辺のマンション建設計画で、原風景が永遠ではないことに気づき、離れて想う対象だった故郷に改めて向き合うために、プロジェクト「28ZAKI(つやざき) 海浜博覧祭」を行なったこと。そして第4章「継母なる大地」で、母なる風景がじつは心の中にあり、更新、重層化されていくものであること、その再構築が創作であり「継母なる大地」なのだという結論に辿り着く。

中間審査会では、論文作成の遅れと難解な作品との整合性から、完成を危ぶむ声もあった。とくに前半部1、2章の自伝的部分は、エッセイ風になる不安を感じさせたが、最終的には審査員から「感動した」という感想が出たほどにリアリティのある記述となった。少時の小さな願かけや決め事など、ごく私的な秘儀が現在の制作に直結していることも、本論文で初めて明らかになった。筆者の表現とコンセプトはなお変化途上にあるが、現在の地平を省察した学位論文として十分な内容と判断され、審査会で合格と判定された。

(作品審査結果の要旨)

友清は自作を友清自身の故郷である九州での原風景・原体験を再構築した「風景画」として位置づけることから始めている。

「原風景」をあえて簡易的な素材を用いて様々なスケール感で再現すると云う独特な方法を取り。友清の制作方法と素材についての特異性は明瞭である。段ボール紙や板きりで工作のように作られた箱、ものとして並べられた風景、描いた絵もその中でもう一度小さな家具やお気に入りの調度品のように設える。それらはキャストが付けられていて移動可能、彼女はこれらを引きずりながらまるで「旅」をしているかの様で

ある。

さらには、人の僅かな痕跡を作品に取り入れることで、自然と人の儀式の媒介物をつくる。故郷の九州では、多様な因習や習慣が残っていたと云うが、それらの人々の行為の残骸がものに残る。さらに、友清は、彼女自身の日常生活での奇癖を列挙している。自分の着古した洋服をハサミで解体する、その切断は快感を伴うと語っている。10年程も使ったリュックに手紙を入れて川に流す。愛読書を千切って波にさらわせる。一番大事にしていたドレスを浜辺で燃やす～等々、一連の小さな喪の儀式である。これらの残骸が作品の中に取り込まれている。自分自身の経験から「喪失」という感覚を模索するようになり、なにかが欠如したものや状態を意識するようになったと云う。彼女の作品の一つの特徴にエモーショナルな（情動的な）要素があるが、移ろい易い形象に託された感情と云っても良いであろう。

博士展作品「dream around the sunset」では、彼女のこれまでの行為と作品がさらに対象化されて、ある「場」や「風景」又は「結界」を作ると云う入れ子の構造を持ち展開されてきている。

この作品は故郷での制作と展覧会企画の活動を契機にしている。地元の高層マンション建築計画に対して住民からの反対運動が起きていた。友清は、住民と市と建設業者の3者による会議を映像で記録している、その土地特有のものが根こそぎ画一化してしまう様を目の前にして、会議での行き場のない堂々巡りの議論と住民の諦めが映されている。

映像は大きく壁面に投影され、その前には、これまで友清が作ってきた一連の作品が四隅に置かれた簡素な壁によってできた空間に集められている。ある種の「結界」が見て取れるが、鑑賞者は外から覗き込むだけで中には入れない。頼りない紐が入口のように空いた面には掛けられていて侵入を妨げている。

これらの対比構造を持った設置では新たな外の視点を出してきているが、プランニングの際には他にも幾つか考えられていて、他の提示の可能性もあったことを付け加えておく。それまでの作品提示においては、鑑賞者は作品が置かれた中に入ることで、様々な視点を追体験することも可能であった。時には細部を明瞭に注視できたのである。結界の中におさめられたものは離れた別の視点で見ることになる。何か一つの決着する答えがあると云うのではないが、むしろ幾つもの視点の同時提示も可能であったとも云えよう、人の内側や現実の世界をどのように見るか、見せていくかは、再度、今後の課題として続いていく問題である。

「風景画」として意識された友清の一連の制作行為は、課程博士学位として相応しい内容である。さらに、原風景を再構築すること、自然と人工物と人間の交流の際の感受性を「継母なる大地」として描き直すことと云う友清の明確な意思も高く評価するものである。

（総合審査結果の要旨）

インスタレーションという表現形式で区分けされそうになる自身の作品群を、友清千聡は敢えて「風景画」と位置づける。ボール紙芯やぼろ布や木端など印象としては貧弱ともいえる素材で作られた立体群、絵画を載せる段ボール箱、箱に可動性を与える滑車等の要素が、彼女の作品中にはよく登場する。あたかも子供が隠し場所にしまっていたかのように秘密めいた多様な物質の断片が、そこに煌めきや色を添える。それら物質の断片は、装飾とも寓意とも違う意味を持ってそこに置かれる。言うなればそれらの一つ一つは、人間と自然の両方を仮に宿すための「形代」である。

「生ける人間は、身体という形と、魂という流れるものの中、両者の境界に存在する「もの」だ（論文中p. 35）」

論文中に書かれたこのような生命観が友清の過去作品にも色濃く表れていた。断絶した「もの」の寄り集まりが鑑賞者の脳裏で任意に結ばれるとき初めてそれぞれの「風景画」として結像する、という構造を友清の作品は持っているのだ。

その「風景画」の「風景」とは人間にとって一体何かという問いを、自己言及的な言質を踏まえつつも普遍的な問いとして投げかけようとしているのが、論文『継母なる大地』である。友清の故郷は九州の都市と里山の狭間に位置する。農地の無造作なビニール紐や神社の小さな紙飾りなどの光景に触れながら「人工物の断片からさまざまな大自然を想像する習慣（p. 4）」が出来たと言う。圧倒的な自然の気配への想いを小さ

な形代の中に見立て、ごく個人的な習俗のようなものを大事にしていた幼年時代の特異な感性が、論文中で自伝的に紹介される。風景とは、彼女にとって単なるノスタルジックな憧憬に留まるものではない。傷みを持って解体されながらもまた断片によって再構築される、可塑性のある「認識」そのものなのだ。論文タイトルの「継母なる」風景とは、多様な逡巡を通過した彼女が辿り着いた、ある種の「母なる故郷の風景＝原風景」信仰のようなものへのアンチテーゼから出て来た言葉とも言える

論文と同時進行して作られた作品『dream around the sunset』は従来作品と違い、ドキュメンタリー映像を含んでいる。故郷の土地開発を巡る住民の論争を撮影した映像だ。抜き差しならない時代変化の有様を、増幅されたノイズのように立体群の背後に対置することで、鑑賞者に新たな原風景の解釈を促している。自身の故郷の実態をそれとわかるように作品中に取り入れることは、友清の大きな変化の兆しと言えよう。が、本作ではまだ完全にその狙いが定まっているとは言えない。また「風景」「風景画」といったキーワードが作品中の断片的な要素のなかに留まっている印象があり、ダイナミックな読み取りの方法を鑑賞者に構造的に示すことに関しては、未だ未熟な部分が残る。

また論文の執筆の進行は難航を極めるものであった。最大の難点は、自伝的な要素を論述にいかにか絡ませるかということだった。しかし指導段階で「美術家が作品論から美術を考えることは自然なことで、自伝的要素も展開上必要なことである」という指導教官の意見が一致し、本人の世界観の大半を彩る自伝的部分を、要素として論文中に残した。

以上のような作品、論文への見解と評価を経て、課程博士学位として相応しい内容に値するとして、全員一致でこのような評価とした。